

## 宗教と戦争 —信仰と平和の間で—

六条円卓会議は、宗門内外の有識者の知見を得つつ、浄土真宗本願寺派の宗制に掲げられる「自他共に心豊かに生きる」ことのできる社会の実現」に、宗門がどのように貢献できるのかを具体的に模索するために設置されている会議です。毎年開催し、さまざまなテーマについて議論を深めています。

第12回六条円卓会議は、2025（令和7）年3月13日に開催いたしました。テーマは、第13回宗門教学会議（2024（令和6）年7月31日開催、テーマ「平和のために何をすべきか／何ができるか—戦後80年を迎えるにあたって—」、『宗報』2024年10月号、11・12月合併号にて報告）の内容を受けて、「宗教と戦争—信仰と平和の間で—」としました。

2025（令和7）年、日本は戦後80年を迎えました。近年、戦争に関する諸分野の考究が進展し、宗教・仏教と戦争との関わりも種々論じられてきている中で、どのような視点で戦争を受け止め、

宗教と戦争の関係を捉えていくべきなのかという問題意識のもと、今回のテーマが設定されました。会議では、前半の有識者発題において、宗教学・戦争論を専門とし、宗教および戦争・軍事に関する思想と歴史について、さまざまな事例を通して広く論じられている石川明人先生（桃山学院大学教授）をお招きし、戦争と宗教の歴史、現実の課題、そして「人間的な営み」である戦争についてご教示いただき、後半の全体討議では、戦争に宗教はどう関わってきたのか、これからどう関わっていくのか、人類として戦争をどう論じていくべきなのか、宗教と戦争の交錯点を学びながら平和の意味について議論を深めました。

今号では、現在、世界で信者数が最も多いキリスト教での戦争や平和に対する考え方や、平和への向き合い方についてご発題いただいた、石川先生による講義の内容（前半）を報告いたします。

## ◆有識者発題（前半）

全体テーマである「宗教と戦争―信仰と平和の間で―」は、とても重要ですが、大きなテーマなので、「キリスト教は戦争や軍事について、どう考えてきたのか」ということに絞ってお話しさせていただきます。

今日の参加者は、ほとんどが仏教の関係者かと思いますが、キリスト教は全世界の中で信者数の一番多い宗教です。アメリカの研究機関、ピュー・リサーチ・センターによれば、世界の総人口の約

31・5%を占めると言われています。現在の総人口は約80億人ですので、だいたい24億人ぐらいですね。この24億人のキリスト教徒が、戦争や軍事についてどう考えているのかということを、一口に説明することはできませんが、基本線はこう考えられてきたということを紹介し、そこを糸口にして宗教と戦争について考えてみたいと思います。

## 1、宗教者、聖職者、軍人

突然ですが、この写真（軍服を着た姿、写真は省略）の方は、いったいどういう

方なのか、ぱっと見て、すぐにおわかりになるでしょうか。彼はアメリカ人です。この服装を見て、軍人さんだろうな、ということはお察しがつくと思います。

次の写真（迷彩服を着た姿）です。先ほどの写真と同じ人です。先ほどは制服でしたが、こちらは陸軍の迷彩服を着ています。腕には星条旗が付いており、どう考えても、何か偉い軍人さんというイメージかなと思います。

では、次の写真（祭服を着ている姿）を見たら、どうでしょう。これも同じ人です。赤い祭服を着ているということから、ひょっとして宗教家と思われるか

## 石川 明人（いしかわ あきと）



桃山学院大学教授。1974年生まれ。北海道大学卒業、北海道大学大学院博士後期課程単位取得退学。博士（文学）。専攻は宗教学、戦争論。宗教、および戦争・軍事に関する思想と歴史を研究テーマとする。著書に『ティリッヒの宗教芸術論』（北海道大学出版会、2007年）、『戦争は人間的な営みである』（並木書房、2012年）、『キリスト教と戦争―「愛と平和」を説きつつ戦う論理―』（中公新書、2016年）、『宗教を「信じる」とはどういうことか』（ちくまプリマー新書、2022年）、『戦争宗教学序説―信仰と平和のジレンマ―』（角川選書、2024年）ほか多数。

もしませんが、その通りです。

彼は陸軍の軍人（士官）ですけれども、同時にカトリックの司祭（神父）です。軍人だけれども、同時に宗教家でもある立場のことを、アメリカでは、従軍チャプレンという言い方をします。かみ砕いて言えば、軍隊に専属の聖職者のことで、アメリカの場合は士官の階級を持ちます。

チャプレン向けの教科書によれば、現在、将兵の78%は、128の宗教・教派のいずれかの信仰を持っています。チャプレンはそのうち112の宗教・教派をカバーしているそうです。そして、「宗教」「道徳」「士気」という3点に関わる宗教サポート活動を行うと解説されています。具体的には、礼拝、洗礼式、葬儀、聖書勉強会、カウンセリング、道徳教育、自殺防止、ストレスマネジメントなどなど、いろいろな角度から将兵を精神面でフォローをする、そういう役割が期待されているということです。

チャプレンは、所属する部隊の軍事行

#### 従軍チャプレン（従軍司祭、従軍牧師）

- ① 現在、将兵の78%は128の宗教・教派のいずれかの信仰を持っている。チャプレンはそのうち112の宗教・教派をカバーしている。
- ② 宗教サポート活動は「宗教」「道徳」「士気」の3点に関わる。

礼拝・洗礼式・葬儀・聖書勉強会  
カウンセリング、道徳教育  
自殺防止、など。



動が現地の宗教文化に与える影響を事前に予測して、指揮官に報告や助言をすることも、重要な仕事だと記されています。また、宗教的多元主義の状況に適応

- ③ 所属する部隊の軍事行動が現地の宗教文化に与える影響を事前に予測し、指揮官に報告や助言をすることも重要な仕事。

- ④ チャプレンは、宗教的多元主義の状況に適応して、さまざまな信仰をもつ軍の構成員に公平に気を配ることのできる人物でなければならない。

- ⑤ 2023年現在（陸軍）は、  
チャプレン : 3,015名  
RAF : 2,796名  
チャプレン候補生 : 539名



して、さまざまな信仰を持つ軍の構成員に公平に気を配ることができ人物でなければならぬ、ということも書かれています。当然ながら、各チャプレンは、

特定の宗教・教派に属していますが、部隊や基地に配属された後に自分と同じ教派の信者の兵士だけを相手にするわけではありません。違う宗教、違う教派、さらには無宗教とか無神論を標榜している兵士たちにもちゃんと公平に気を配ることが必要であるということも、教科書には書かれています。

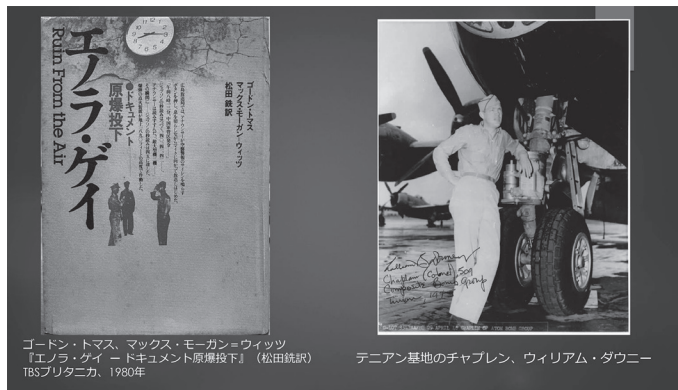
2023（令和5）年現在、陸軍だけでチャブレンが3015名、もともとチャブレン・アシスタントと言われていたRAF（Religious affairs specialist）が2796名、そしてチャブレン候補生が539名いると説明されています。ほかに海軍、海兵隊、空軍を入れると、おそらくこれの倍以上いるのではないかと思われます。

従軍チャブレンは、建前としては「合衆国憲法」で保障されている信教の自由、信仰の自由を、軍隊の中においても保障するために、制度として維持されています。また、一口に兵士といっても、皆が好き好んで軍隊に来ているとは限らず、

いろいろなライフヒストリーを抱えた兵士がいます。そういう人たちを支えるために、宗教上のフォロワーをする人が必要だとされているわけです。

一方、戦争をする、時には大勢を殺してしまふ、そういう組織の活動に、愛と平和を唱える宗教家がいるというのは、直感的に何かおかしいなという気がします。日本人にとって一番わかりやすい例が、原爆投下のときのチャブレンだと思っています。詳しくは、『エノラ・ゲイードキメント原爆投下』という本に書いてありますが、当時、B29エノラ・ゲイが出撃するデニアン基地に、たまたま配属されていたチャブレンが、出撃前に乗組員たちを前に、「任務が無事に成功しますように」というお祈りをして出撃をさせたということがわかっています。こうしてエノラ・ゲイが送り出され、原爆を投下して、一瞬で何万もの人を殺してきたわけなのです。こういうのを見ると、やはりおかしいよなという感じを、私は強烈にするのです。

軍人一人ひとりにも大切な家族がいるので、そういう人に過酷な軍隊生活の中で何とか耐えられるようにフォロワーする人も必要だという気持ちもわからなくはない。けれども、原爆の例とかを見ると、やはりおかしいよなという気も正直なところはします。



ゴードン・トマス、マックス・モーガン=ウィッツ  
『エノラ・ゲイードキメント原爆投下』（松田鏡訳）  
TBSブリタニカ、1980年

デニアン基地のチャブレン、ウィリアム・ダウニー

## 2、戦争・平和について どう書かれているか

アメリカの圧倒的多数はキリスト教徒です。では、キリスト教は平和や戦争、そして軍事について、いったいどう考えているのでしょうか。キリスト教は、教典宗教なので、そもそも聖書にどう書かれているのかということを確認するところから始めたいと思います。

キリスト教の聖書は、『旧約聖書』と『新約聖書』の2つからなります。前者は、元はユダヤ教の教典でいろいろな人がいろいろな時代に書いた39の文書の集合体です。後者は、これはキリスト教オリジナルの教典で、『旧約聖書』を踏まえたかたちで成り立っており、西暦50年ごろから130年ごろにかけてギリシャ語で書かれた計27の文書からなります。

まず、『旧約聖書』には、「十戒」という有名なものがあり、その6つ目に、「人を殺してはいけない」ということが書い

てあります。ただし、その次の次のページぐらいには、「こういう人は、死刑に処さねばならない」と死刑の条件について書かれています。人を殺してはいけないと言っているのに、そのすぐ後に死刑について書いてあるのはどういう意味なのかと、素直に読めば混乱してしまいます。実際に『旧約聖書』には、戦争のやり方や、かなり苛烈な戦争の描写がたくさん出てきます。場合によっては、戦争を奨励している、何か暴力的なことを肯定しているようにも見えます。

ただし、先に述べたように、『旧約聖書』というのは、一人の人間が最初から最後まで全部書いたのではなく、いろいろな人がいろいろな時代にばらばらに書いた39の文書の集合体なので、別の箇所を見ますと、明らかに平和主義的、非暴力主義的な言葉も出てきます。

復讐してはならない。民の人々に恨みを抱いてはならない。自分自身を愛するように隣人を愛しなさい。

（『レビ記』）

後のイエスの非暴力主義、平和主義も、ほぼこれを繰り返しているかたちになっています。復讐したいという気持ちにはわかるが、勝手に復讐をするべきではない。暴力のみならず、恨みを抱くことさえ駄目だ。自分を愛するように自分の隣人を愛しなさいと、こういう教えがあります。

また別の箇所では、

彼らは剣を打ち直して鋤とし、槍を打ち直して鎌とする。国は国に向かって剣を上げず、もはや戦うことを学ばない。（『イザヤ書』、『ミカ書』）

とあります。キリスト教で平和について祈るときに、よくこの箇所が朗読されたりする、有名な箇所です。戦争の道具、武器を溶かして鋤や鎌など農業の生産的な道具にする。そして、国はもう戦争なんてしない。戦うことをもうやめる。そういう趣旨の文言かと思えます。

『旧約聖書』では、一方では戦争を勧めているところもあるけれども、他方では恨みを抱くことさえ禁じています。そ

して、武器を手にもすることも、もうやめようと言っています。戦争に対して肯定的に見えてしまうところもありますが、明らかに戦争、暴力に対して否定的な文言もいくつも出てくるわけです。

次に、キリスト教オリジナルの教典である『新約聖書』の中から、有名な箇所を三つ紹介いたします。

悪人に手向かつてはならない。だれかがあなたの右の頬を打つなら、左の頬をも向けなさい。

敵を愛し、自分を迫害する者のために祈りなさい。

剣をさやに納めなさい。剣を取る者は皆、剣で滅びる。

いずれも『マタイによる福音書』で、イエスの言葉として伝えられています。これら三つを読めば、どう考えても暴力を否定しています。非暴力主義、平和主義だと解釈するのが普通かなと思います。

ただし、実は『新約聖書』という27の文書の集合体の中では、イエスもパウロ

も、戦争・軍事それ自体について、直接は何も語ってはいません。「右の頬を打つなら、左の頬をも向けなさい」と書いてある。だから、当然ながら戦争という行為にも批判的であるに違いないと解釈しているというのが実態です。

キリスト教の歴史では、戦争や暴力には批判的で、少なくとも戦争や暴力が奨励されるということはありませんでした。しかし、いついかなるときも、完全に非暴力を貫けと言い、現にそのような行動をしてきたのかというと、決してそうではありません。現実には、正当防衛だけは認めざるを得ない。これが主流の考え方だったのです。

### 3、戦争をどう考えるか

ローマ・カトリック教会における戦争に関する見解を知ることができる資料として、『カトリック教会のカテキズム』、『第二バチカン公会議公文書』の中の『現代世界憲章』、そして『教会の社会教説

綱要』があります。例えば、『カテキズム』では戦争に関して、

正当防衛は、単に権利であるばかりではなく、他人の生命に責任を持つ者にとっては重大な義務となります。共通善を防衛するには、不正な侵犯者の有害行為を封じる必要があります。合法的な権威を持つ者には、その責任上、自分の責任下にある市民共同体を侵犯者から守るためには武力さえも行使する権利があります。

と書かれています。ポイントは、正当防衛は権利であるのみならず、場合によっては義務でもあるとはっきりと書かれています。結構驚きですよね。

そして、同じこの『カテキズム』には、武力行使をしても仕方がない状況、武力行使が許される条件として、次の内容が挙げられています。

①国、あるいは諸国家に及ぼす攻撃者側の破壊行為が持続的なものであり、しかも重大で明確なもので

あること。

②他のすべての手段を使っても攻撃を終わらせることが不可能であるか効果をもたらさないということが明白であること。

③成功すると信じられるだけの十分な諸条件がそろっていること。

④武器を使用しても、除去しようとする害よりもさらに重大な害や混乱が生じないこと。

この4つの条件がちゃんと満たされているならば、武力行使もやむを得ないと、はつきりと書かれています。

『教会の社会教説綱要』にも、基本的には同じことが述べられ、さらに

正当防衛の必要性は、国家が軍隊を持つことを正当化します。

と書かれています。

『現代世界憲章』では、

祖国への奉仕に専念して戦線に従事している者は、自分が諸国民の安全と自由のための奉仕者であると考えべきである。この任務に正しく従

事している間、彼らは真に平和の確立に寄与している。

と、信仰者であっても軍人として働くということが肯定されています。

要点をまとめると、カトリックでは、戦争は確かに悪であるということは繰り返し述べられています。戦争がよくないことだというのは、大前提です。ただし、正当防衛も認めないのかという点決してそうではありません。正当防衛は十分に認められねばならない。それは権利であるのみならず義務でもある。そうである以上、国が軍隊を持つことは正しいし、国が軍隊を持つことが正しいければ、当然軍隊の中で働くということも正当である。従って、教会は軍人もちゃんとフォローせねばならない、支えてあげなくてはいけない。だから、神父、カトリックの司祭が、同時に軍人として兵士たちの世話をすることは当然正しいこととなります。教会の方針的に正しいことになるわけです。

次に、プロテスタントは、一つのゲ

ループではなくて、カトリックや東方正教会などとはまた別個につくられた、たくさんある教派を大まかにくくったカテゴリーです。ですので、プロテスタントとしての戦争論とか平和論とか、そういう問題設定をすることはそもそもできませんが、神学史、キリスト教思想史の教科書に出てくるような神学者たちの戦争理解をいくつか拾っていくと、多くの人が正戦論、つまり条件付きで武力行使を認める立場に立っています。例えば、マルティン・ルターは、著書の中で、武力というものとは大きな不幸を防ぐための小さな不幸なのであって、それ自体は決して望ましいものではないけれども、軍事行動を丸ごとすべて否定することはできないという立場を取っています。

ここで二つの信仰告白、信仰基準というものを紹介します。ルターの同僚であったメラニヒトンが起草した『アウグスブルク信仰告白』には、こう書かれています。

この世におけるすべての権威と定め

られている支配と法律とは、神によつて作られ、設定されたよい秩序である。またキリスト者は、政府、諸侯、裁判官の地位に罪を犯すことなく就くことができ、帝国法やその他の法に従つて、判断と判決を下し、悪人を剣によつて罰し、正しい戦争を行い、戦い、売買し、求められる宣誓をし、財産をもち、結婚するなどのことをしてもよい。

悪人を剣によつて罰することはいい。そして「正しい戦争」、やむを得ない戦いというものがあるということも、明確に書かれています。

次に、カルヴァン系の教会の信仰理解の基準が整理された『ウェストミンスター信仰基準』には、次のように書かれています。

キリスト者が、為政者の職務に召されるとき、それを受け入れ果たすことは、合法的であり、その職務を遂行するにあたって、各国の健全な法律に従つて、彼らは特に敬けんと正

義と平和を維持すべきであるので、この目的のために、新約のもとにある今でも、正しい、またやむをえない場合には、合法的に戦争を行うこともありうる。

いかなる場合も戦争は駄目だ、軍隊、軍事を持つことも駄目だと書かれるのかと思いきや、実は正しい場合、やむを得ない場合には、武力行使を行うこともあり得ると、はっきり書かれています。

#### 4、正戦論をめぐる議論

正戦論(Just War Theory)とは、戦争が正しいものとはもちろん言わないが、こういう条件が整っていた場合には、武力行使もやむを得ない、というような、正しい武力行使の条件等について議論をする一連の思想のことを言います。

キリスト教では、西暦30年ごろ、イエスが十字架につけられて殺され、その後、残された弟子、パウロらが宣教を始めますが、最初の300年近くはローマ帝国

から強い迫害を受けていました。ところが、西暦313年、皇帝コンスタンティヌスのころ、いわば政治的な統一に利用するとうかたちで、キリスト教が公認され、次第にローマ国内でキリスト教徒の活動が活発化します。そして392年、皇帝テオドシウスの時代に、ローマ帝国の「国教」になります。つまりイエスが死んで360年ぐらいで、キリスト教はローマ帝国の体制側の宗教になるわけです。

体制側の宗教になるということは、宗教、教会が政治と密接な関係を持たざるを得なくなるということを意味します。キリスト教徒の中には、もちろん戦争・軍務に否定的な者たちはいましたが、現実問題として、いかなる戦争も放棄するということをしていると、社会、国家が成り立ちません。全体としては正戦論、すなわち条件付きでは武力行使を肯定するという方向に動いていきます。

4世紀から5世紀にかけてアウグスティヌスという有名な神学者が現れます。いくつかの書物の中で述べている彼

の思想を総合してみますと、もちろん戦争それ自体を肯定しているわけではありませんが、やむを得ない範囲内の武力行使が世のなかには確かにあるということを確認していると解釈されています。大まかに見るならば、キリスト教における正戦論は、5世紀からもうすでに始まっていたと言えます。

そして、現代に至る議論のベースになる思想をつくったのが、13世紀の思想家トマス・アクィナスです。彼は戦争が正しいものであるための条件として、3つの議論をしています。

まず正当な権威。戦争は、私人に属する仕事ではなくて、戦争を行う際の全権とか決定は君主の権威によらなければならないとされています。

そして正当な理由。攻撃される人たちには、何らかの罪のために攻撃を受けるに値するという原因がなければならぬ。

そして正当な意図。戦争は善を助長し悪を避けるためにやるという正当な意図

に基づいてなされなければならない。こういう議論をしています。

要するに、カトリックでもプロテスタントでも、条件付きで武力行使を容認する、いわゆる正戦論という議論がこれまで主流であったということになります。もちろん小さなグループにおいては、完全な絶対平和主義、純粋な非暴力主義が貫かれてきました。そういう人たちがいるんですけども、主流派と言える人たちの中では、正戦論が当然のものとして主張されてきたというのが歴史的な事実です。

## 5、信仰と戦争・平和

今日の議論をまとめておきます。

第一に、21世紀の現在でも、キリスト教信仰に則って絶対平和主義、非暴力主義を、これだけは完全に守らなくては行けないと主張するキリスト教徒は少なくありません。このことは、決して省略してしまつてはいけません。



第二に、完全な非暴力主義のキリスト教徒たちが、その社会とかその国で「主流」と言えるほどの勢力になって、実際に絶対平和主義の非武装国家を実現したという例は、少なくとも近代以降はありません。

第三に、キリスト教主流派の歴史にお

いては、条件付きで武力行使を容認する、これが基本的なスタンスとして受け継がれてきました。非暴力主義、絶対平和主義ももちろんありますが、主流としては、やはり正戦論でこれまでやってきたというふうに言わざるを得ません。

第四に、正戦論はどういうプロセスで来たのかというと、5世紀に現れて、13世紀にはもう権威や伝統さえ有するようになって現在に至っているということです。

## 6、平和について

### 「正直に」考える

最後に、私たちがいま一度考えてみるべきことについてお話ししておきます。私たちは、本当に平和主義者である覚悟があるのかということです。

戦争について、平和について考えている人に「あなたは平和主義者ですか」と聞けば、「もちろん私は平和主義者です」と答えるでしょう。しかし、自分は本当

に平和主義者なのか。いついかなるときも本当に武力・暴力に対して反対できるのか。自分や家族がトラブルにまみわれた際にも平和主義を貫き通せるのか。それを自問しておくことは、大切だと思います。

本当に正直に、「平和って何なのか」「自分は本当に平和主義者でいられるのか」「どんなときもその思想を貫けるのか」と問うていきますと、実は結構難しい問題だと気付かざるを得ないと思います。平和・非暴力というものについて、本音として、自分はこういうふうに考えているのかを直視しておくことが根本にないといけないように思います。

平和について話すと、「平和のために私たちに何ができるでしょうか」という話になりがちです。それはそれで重要な議論だとは思いますが、そこにいく前に、まずそもそも私自身は本当に平和主義を貫けるのか。本音としては「平和」についてどう考えているのかということころを、正直に、自分自身に対してだけで

もいので、いったん告白してみるということが実はかなり大事なんじゃないかなと思います。

\* 次回は、有識者発題をうけて行われた全体討議（後半）の内容を報告します。

総合研究所 現代教学・課題担当